

一寸怪

泉鏡花作

明治四十二年十月

怪談の種類も色々あるのを、理由のある怪談と、理由のない怪談とに別けてみよう。理由のあるといふのは、例へば、因縁談、怨霊などといふ方で。後のは、天狗、魔の仕業で、殆ど端倪すべからざるものを云ふ。これは北國邊に多くて、關東には少ないやうに思はれる。私は思ふに、これは多分、この現世以外に、一つの別世界といふやうなものがあつて、其處には例の魔だの天狗などいふのが居る。が偶々その連中が吾々人間の出入する道を通つた時分に、人間の眼に映ずる。それは恰も、彗星が出るやうな工合に、往々にして見える。が、彗星から、天文學者が既に何年目に見えると悟つて居るが、一御へR TVごへ / R TV連中になるとさうはゆかない。何日何時か分らぬ。且つ天の星の如く定つた軌道といふべきものがないから、何處で會はうもしれない唯ほんの一瞬間の出來事と云つて可い。ですから何日

の何時頃、此處で見たから、もう一度見たいといつても、さうは行かぬ。川の流は同じでも、今は先刻の水ではない。勿論この内にも、狐狸とか他の動物の仕業もあらうが、昔から言傳への、例の逢魔が時の、九時から十一時、それに丑三といふやうな嫌な時刻がある。この時刻になると、何だか、人間が居る世界へ、例の別世界の連中が、時々顔を出したがる。昔からこの刻限を利用して、魔の居るのを實驗する方法があると云つたやうなことを、過般仲の町で怪談會の夜中に沼田さんが話をされたのは、例の「膝摩り」とか「本叩き」といつたものです。

「膝摩り」といふのは、丑三頃、人が四人で、床の間なしの八畳の座敷の四隅から、各一人づゝ同時に中央へ出て来て、中央で四人出會つたところで、皆がぴつたり坐る。勿論室内の内は燈をつけず暗黒にして置く。其處で先づ四人の内の一人在次の人の名を呼んで、自分の手を、呼んだ人の膝へ置く、呼ばれた人は必ず返事をして、又同じ方法で、次の人の膝へ手を置く。といふ風にして、段々順を廻すと、丁度其の内に一人返事をしないで坐つて居る人が一

人増えるさうで。

「本叩き」といふのは、これも同じく八疊の床の間なしの座敷を暗がりにして、二人が各手に一冊宛本を持つて向合ひの隅々から一人宛出て来て、中央で會つたところで、其本を持つて、下の疊をバクノ叩く。すると唯二人で、叩く音が、當人は勿論、襖越に聞いて居る人に迄、何人で叩くのか、非常な多人數で叩いて居る音の様に聞えると言ひます。これで思出したが、この魔のやることは、凡て、笑聲にしても、唯一人で笑ふのではなく、アハ、、、、と恰も一數百人の笑ふが如き響がするやうに思はれる。私が曾て、逗子に居た時分、其の魔がさしたと云ふ事について、恚う云ふ事がある。丁度秋の初旬だつた。當時田舎屋を借りて、家内と女中と三人で居たが、家主はつい裏の農家であつた。或晩私は背戸の据風呂から上つて、縁側を通つて、直ぐ傍の茶の間に坐ると、臺所を片着けた女中が一寸家まで遣つてくれと云つて、挨拶をして出て行く、と入違ひに家内は湯殿に行つたが、やがて、手桶が無いといふ。私の入つて居た時には、現在水が入つてあつた

ものが無い道理はない、といったが、實際見えない
といふ。私も起つて行つて見たが、全く何處にも見
えない。奇妙な事もあるものだと思つて、何だか可
厭な氣持がするので、何處迄も確めてやらうと、段々
考へて見ると、元來この手桶といふは、私共が引越
して行つた時、裏の家主で貸して呉れたものだから、
若しやと思つて、私は早速裏の家へ行つて訊ねてみ
ると、案の條、婆さんが黙つて持つて行つたので。
其の婆さんが湯殿へ來たのは、丁度私が湯殿から、
縁側を通つて茶の間へ入つた頃で、足に草履をはい
て居たから聲音がしない。農夫婆さんだから力があ
るので、水の入つて居る手桶を、ざぶりとも言はせ
ないで、その儘提げて、暢氣だから、自分の貸した
もの故、別に斷らずして、黙つて持つて行つて了つ
たので、少しも不思議な事はない。が、若しこれを
よく確めずに置いたら、をかしな事に成らうと思ふ。
こんな事でも其の機會がこんがらかると、非常な、
不思議な現象が生ずる。がこれは決して前述した魔
の仕業でも何でも無い、唯或る機會から生じた一つ
の不思議な談。これから談すのは、例の理由のない
方の不思議と云ふのです。これも、私が逗子に居た

時分に、つい近所の婦人から聞いた談、其の婦人が
未だ娘の時分に、自分の家にあつたと云ふので。静
岡の何處か町端れが、その人の父の屋敷だつた處、
半年ばかりといふものは不思議な出来事が續け様で、
發端は五月頃、庭へ五六輪、菖蒲が咲いて居
た。・・・その花を、一朝きれいにもぎつて、
戸棚の夜具の中に入れてあつた。初めは子供の悪戯
だらう位にして、別に氣にもかけなかつたが、段々
と悪戯が高じて、來客の下駄や傘がなくなる。主人
が役所へ出懸けに机の上へ紙入を置いて、後向に洋
服を着て居る間に、それが無くなるゝ或時は机の上
に居いた英和辭典を縦横に斷切つて、それにインキ
で、輪のやうなものを、目茶苦茶に樂書がしてある。
主人も、非常に閉口したので、警察署へも依頼した、
警察署の連中は、多分その家に七歳になる男の兒が
あつたが、その行爲だらうと、或時その兒を紐で、
母親に附着けて置いたさうだけれども、悪戯は依然
止まぬ。就中、恐しかつたといふのは、或晩多勢の
人が来て、雨落ちの傍の大きな水瓶へ種々な物品を
入れて、其の上に多勢かゝつて、大石を持つて来て
乗せて置いて、最早これなら、奴も動かせまいと云

つて居ると、其の言葉の切れぬ内に、グワラリと、
非常な響をして、其の石を水瓶から、外へ落したの
で、皆が顔色を變へたと云ふ事。一時などは縁側に
何だか解らぬが動物の足跡が付いて居るが、其なん
ぞしらべて丁度障子の一小間の間を出入するほどな
動物だらうといふ事だけは推測出来たが、誰しも、
遂にその姿を發見したものは無い。終には洋燈を火
のまゝ戸棚へ入れるといふやうな、危険千萬な事に
なつたので、轉居をするやうな始末、一時は非常な
評判になつて、家の前は、見物の群集で雑沓して、
賣物店まで出たとの事です。

これと似た談が房州にもある。何でも白濱の近傍
だつたが「農家に、以前の話とおなじやうな事は
じまつた。家が丁度、谷間のやうなところにあるの
で、その兩方の山の上に、獵夫を頼んで見張をした
が、何も見えない。が、奇妙に夜に入るとたゞ獵夫
がつれて居る犬ばかりには見えるのか、非常に吠え
て廻つたとの事、この家に一人、子守娘が居て、そ
の娘は、何だか變な動物が時々来る、といつて居た
さうである。

同じ様に、越前國丹生郡天津村の風巻といふ處に、善照寺といふ寺があつて、此處へある時村のものが、貉を生擒つて來て殺したさうだが、丁度その日から、寺の諸所へ、火が燃え上るへ・・・住職も非常に恐れて檀家を狩集めて見張ると成ると、見て居る前で、障子がめら／＼と燃える。ひやあと飛ついて消す間に、梁へ炎が絡む。ソレと云ふ内、羽目板から火を吐出す。凡そ七日ばかりの間、晝夜詰切りで寝る事も出来ぬ。ところが、此寺の門前に一軒、婆さんと十四五の娘の親子二人暮しの駄菓子屋があつた。その娘が境内の物置に入るのを、誰かちらりとした。間もなく、その物置から、出火たので、早速駈付けたけれども、其だけはとう／＼焼けた。此奴かと云ふので、拷問めいた事までしたが、見たものゝ過失で、焼けはじめの頃自分の内に居た事が明かに分つて、未だに不思議な話になつて居るさうである。初めに話した静岡の家にも、矢張十三四の子守娘が居たと云ふ。房州にも矢張居る。今にも、娘がついて居る。十三四の女の子とは何だか其の間に關係があるらしくなる。これは如何いふものか、解らない。昔物語にはこんな家の事を「くだ」付き家と稱

して、恐こはがつて居ゐる。「くだ」といふのは狐きつねの様やうで
狐きつねにあらず、人ひとが見みたやうで、見みないやうな種しゆの
動物どうぶつださうで。・・・猫ねこの面つらで、犬いぬの洞どう、狐きつねの
尻尾しつぽで、大おほきさは鼬いたちの如ごとく、啼なくこゑ聲ぬえ鶉えに似にたりとして
ある。追おつて可かんが考ふべし。